ＩＩＡＳ塾ジュニアセミナーテキスト
（VOL. 02011）

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて
－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

日本社会の古層から日本的なるものを発掘した人物

（政治・経済分野）

北一輝に学ぶ

～アジア主義からの人類解放の思想
その構想と挫折～

公益財団法人国際高等研究所
ＩＩＡＳ塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2016 年 1 月 25 日開催の第 31 回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所ＩＩＡＳ塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものである。本テキストの無断転載・複写を禁じます。
※本テキストは、2017 年夏季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて
－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

日本社会の古層から日本的なるものを発掘した人物

北一輝と昭和超国家主義

北　一輝（きた・いっき：1883-1937）は、明治末期に幸徳秋水周辺の社会主義者として出発し、宮崎滔天らとともに孫文らの中国革命運動に奔走、大正後期からは青年将校の国家革新運動の思想的リーダーとなり二・二六事件に連座して処刑されました。その『日本改造法案大綱』は、天皇をいただいた日本の平等化とアジアの植民地からの解放を主張しています。それは社会主義と国家主義・アジア主義の複合物といえましょう。この複雑な思想家の軌跡を辿り、大正・昭和日本の運命を考えます。

筒井　清忠（Kiyotada TSUTSUI）

1948 大分県生まれ。専門は日本近現代史。著書は、『日本型「教養」の運命』（岩波現代文庫 2009）、『近衛文麿』（岩波現代文庫 2009）、『西條八十』（中公叢書 2008）、『昭和十年代の陸軍と政治 』（岩波書店 2007）、『二・二六事件とその時代』（ちくま学芸文庫 2006）、『石橋湛山』（中公叢書 1986）、『帝都復興の時代－関東大震災以後』（中公選書 2011）、『昭和戦前期の政党政治』（ちくま新書 2012）、『二・二六事件と青年将校』（吉川弘文館 2014）、『満州事変はなぜ起きたのか』（中公選書 2015）、『昭和史講義 最新研究で見る戦争への道』（編著、ちくま新書 2015）、『陸軍士官学校事件』（中公選書 2016）、『昭和史講義２』（編著、ちくま新書 2016）など。

目次

はじめに　―　北一輝のバックボーン
　ア　北一輝が誕生した佐渡の土地柄。それは、辺境ながら尊王心に満ちた地
　イ　経済的身体的ハンディを負いながらも漢文学習に注力。そして名文家に

Ⅰ　北一輝の成長の軌跡と、その思想の核心
（1）北一輝の成長の軌跡
　ア　日露戦争開戦前（1901 年)、『社会民主党宣言』に触れ、社会主義に共鳴
　イ　『国体論及び純正社会主義』を上梓。瞠目される
　ウ　『国体論及び純正社会主義』により、当時の「国体論」を強烈に批判
（2）北一輝の思想の核心
　ア　明治維新の理想、「四民平等」の実現
　イ　国民精神に価値を置く社会民主主義

Ⅱ　北一輝の社会変革運動への参画
＜　北一輝と中国革命＞
（1）社会主義者との交流の深まりと、中国の革命運動への接近
（2）中国の革命運動　―清朝崩壊へ
　ア　中国の革命運動への参画
　イ　孫文と宋教仁との路線対立
　　―アメリカ型連邦主義か、日中連携によるアジア主義か
　ウ　孫文ら中国・第二革命蜂起、そしてその鎮圧
　エ　「対華 21 か条要求」に対する反発への対応に腐心
　オ　第三革命勃発　―中国、軍閥割拠時代に
（3）中国革命と日本
　ア　中国の革命体験記『支那革命党及革命之支那』を上梓
　イ　中国人は、明治維新を尊敬し、任侠的精神の発露としての日本の支援を期待
　ウ　何れの革命も、下級青年将校の働きこそが成功の要因

＜　北一輝と社会変革＞
（1）社会問題の研究
　ア　「老壮会」を創設し、社会問題を研究
　イ　「老壮会」」が設立された背景―米騒動などの社会問題
　ウ　「道義的外交」、「アジア解放」などを謳う「猶存社」

（２）社会変革の展望

ア　『国家改造案原理大綱』を執筆。日本国の改造を決意

イ　『国家改造案原理大綱』において、

言論の自由の保障、私有財産権の一部制限、教科書の無償化などを提案

Ⅲ　北一輝の思想の意味　―　国際平等主義と人類解放思想

（１）北の社会主義思想の特異点。それは、国内的平等主義と国際的平等主義の結合

（２）「人類解放の戦士は日本人」として欧米帝国主義の世界支配に対する異議申し立て

（３）「朝日平吾事件」に見る北的社会変革の主体の萌芽

―『国家改造案原理大綱』の広がりとその影響

Ⅳ　第一次世界大戦後の社会不安と国家改造への動き

（１）軍縮の動き、その諸相

ア　第一次大戦後、軍縮の動きが強まり、軍人受難の時代が到来

イ　青年将校に期待を寄せる北。北の思想に惹かれる青年将校

（２）政治腐敗、経済恐慌

ア　普通選挙制度の導入と政治腐敗の進行

イ　世界恐慌の襲来。惨状を呈すドイツ、そして日本の経済社会

（３）クーデター等の発生

ア　相次ぐクーデター未遂事件

イ　クーデター等に参画した人たちの社会階層

ウ　「血盟団事件」、「五・一五事件」を巡ることの顛末

（４）国家改造への動き

ア　国家改造を巡る陸軍内部の抗争

イ　陸軍中央と青年将校との対立

（５）北一輝と「二・二六事件」

ア　「二・二六事件」発生の背景と顛末

イ　北の死刑判決。その最後の姿。

おわりに　―　北一輝の「遺産」

ア　議会政治尊重の重要性

イ　『国家改造案原理大綱』（改題『日本改造法案大綱』）と戦後の民主化施策

ウ　北の予言

質疑応答

次代を拓く君たちへ　―　筒井清忠からのメッセージ　―
　自らの思想を鍛えるとは、批判的に学ぶこと

2016 年 1 月 25 日開催
第 31 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」
テーマ：北一輝と昭和超国家主義
講演者：筒井清忠（帝京大学文学部長・大学院文学研究科長）

はじめに　―　北一輝のバックボーン

2016 年は、「二・二六事件」[1]の 80 周年である。北一輝は、「二・二六事件」を起こした青年将校たちの思想的リーダーとして有名ではあるが、どういう人だったかは、あまり知られていない。

ア　北一輝が誕生した佐渡の土地柄。それは、辺境ながら尊王心に満ちた地

北一輝は 1883 年に佐渡で生まれた。家は裕福で、佐渡中学に進むことができた。佐渡は順徳上皇が配流された地である。高貴な方が流されたところは、天皇家を敬愛する気持ちの念が普通のところより強い。地方にはそのようなところが多い。日本人の天皇崇拝に関しては、多くの人が分析している。その筆頭は折口信夫である。彼は配流された王を「流され王」といって、強い崇拝の感情が抱かれるとしていた。天皇のような高貴な方、あるいは宮様が苦労されると、日本人は強く同情して、天皇や宮様を尊敬する気持ちが強くなる。それは、民俗学的観点からも分析されている。佐渡も典型的にそのようなところである。

北一輝の肖像
Public domain,
via Wikimedia Commons

順徳上皇は承久の変で佐渡に流された。そこに順徳上皇の息子の彦成王が、父を慕って来た。しかし、既に亡くなっていたと言われる。その墓が佐渡にある。北が中学生の時、今の高校生ぐらいの時、そこを訪れて書いた文章がある。「ああ、暴（あかしま）なるかな北条氏。ああ、逆なるかな北条氏。北条以前に北条なく、北条以後に北条なし。いやしくも一天万乗の皇帝をして、洋々たる碧海の孤島にかくし、恨みをのんで九泉[2]の人たらしめる。」孤島の大変寂しいところに流されて大変気の毒だという気持ちを書いている。地方にはそういう尊王心が非常に強い面がある。北はそういう環境で育った。

イ　経済的身体的ハンディを負いながらも漢文学習に注力。そして名文家に

北の家は裕福だったものの、その後、家産が傾いて勉学が困難になる。しかも眼病を患っ

---

1 1936 年 2 月 26～29 日、東京で、国家改造を目指す陸軍青年将校が陸軍部隊を率いて反乱、クーデターを試みた事件。

2 九泉《幾重にも重なった地の底の意》死後の世界。黄泉（こうせん）。よみじ。あの世。また、墓場。

て右目を失う。加えて、住んでいる佐渡はマージナルな地。そうした状況の下で、一時期、歌人を志すなど、文学の方面にもかなり志があった。与謝野鉄幹・晶子夫妻が主宰する雑誌『明星』に短歌を投稿して掲載されたこともあった。

ただ、最も勉強したのは漢文である。中国の重要な漢文はほとんど暗記するまで覚えた。漢文を徹底的に勉強したことによって北の文章は名文になった。これが後に、青年将校を惹き付ける大きな要因の一つになる。北がもし名文家でなかったら、同じ思想を持っていたとしても、青年将校があのように惹き付けられることはなかったであろう。

Ⅰ　北一輝の成長の軌跡と、その思想の核心

（1）北一輝の成長の軌跡

ア　日露戦争開戦前（1901 年）、『社会民主党宣言』に触れ、社会主義に共鳴

北一輝が上京したまさにその時、日本で最初の社会主義政党である社会民主党から『社会民主党宣言』が出た。これは、貧富の差をなくし平等な社会を実現しようと説いたものであった。しかし、即、結党禁止、発売禁止になる。だが、北はこれに触発される。そして一旦帰郷して、佐渡新聞に『国民対皇室の歴史的観察』という評論を連載し始めた。しかし、その内容が不穏だとして、すぐ連載中止になる。

折から、1904（明治 37）年に日露戦争が始まった。当時の社会主義者のほとんどは、絶対的平和主義の観点から日露戦争開戦に反対した。幸徳秋水たちは「平民新聞」を出して、その主張を展開した。しかし、北は、そのほとんどの社会主義者と違って開戦を支持した。これが、以後の北の生涯を規定することになる。

ただし、北自身、「平民新聞」を購読し、周りの人にも薦めていた。日露戦争に対する立場は違うが、基本的には社会主義の立場である点は共通している。幸徳秋水たちが出していた「平民新聞」の購読者層を研究した人がいる。日本全国何処でも、アッパーミドルクラス（中流上位階級）以上の人が購読していた。そもそも貧しい人は新聞が購読できない。当時の進歩的思想は、資産がある人の間にまず広まっていった。

イ　『国体論及び純正社会主義』を上梓。瞠目される

北は、家庭の事情は依然として厳しかったが、その後、再度、東京に出て、早稲田大学の聴講生になり、また、帝国図書館（現、国会図書館）に通って勉強した。その成果を 1906（明治 39）年に、借金して『国体論及び純正社会主義』という書物を出した。これがすぐ発売禁止になる。社会主義者として危険視され、警察から目を付けられることになった。しかし、最初に送ってもらって読んだ人、例えば、当時の代表的な何人かの社会主義者、あるいは大学教授たちが感心するほどの内容であった。北は当時 23 歳であったこともあり、若い人が書いたものではなく、幸徳秋水が変名で書いたのではないか、と言われるような大変

秀れた内容であった。

ウ　『国体論及び純正社会主義』により、当時の「国体論」を強烈に批判

『国体論及び純正社会主義』は５編から成り、社会主義を主張している書物である。大変難しく、現代人が読んで簡単に分かるものではない。有名なのは第４編「いわゆる国体論の復古的革命主義」である。ここで北は、日本の歴史を振り返って、政府（文部省）が進めている教育では、日本の一般国民（当時、臣民と呼ばれていた民）は、一貫して天皇に忠節を尽くしてきたと教えているが、歴史的事実を見るとそうではない。乱臣賊子ばかりであると述べている。

結局、歴史的に見れば、天皇が自分で直接統治していたのは、古代、奈良時代と建武の中興の時ぐらいである。その後は、貴族か武家が支配している。平安京は藤原氏、それから後は武士が大体支配している。乱臣賊子ばかりではないかと言って、当時の国体論を強烈に批判した。

（２）　北一輝の思想の核心

ア　明治維新の理想、「四民平等」の実現

北は、明治維新は、近代的な民主国家の建設を目指して行われたにもかかわらず、その四民平等の理想が実現されていない。これを実現するのが、「純正社会主義」、あるいは「社会民主主義」であり、我々のやるべきことだと言っている。それは、暴力などを用いなくても、労働者は多数であり、普通平等選挙制を導入することにより四民平等の社会は実現できると、当時のヨーロッパの社会民主党の主張を引き合いにして主張している。

イ　国民精神に価値を置く社会民主主義

北の主張は、普通の社会民主主義者とは違う。普通の社会民主主義者は万国平等のインターナショナルを主張していた。しかし、北はそれに反対し、尊王攘夷から日露戦争に到る日本人の精神に価値を置く。欧米列強の世界支配に抵抗する日本の国民精神を尊重している。ロシアの暴虐に対して戦争するのは当然だとして日露戦争を肯定する立場をとる。そのような国民国家が集まって、初めて世界連邦が出来ると主張する。ここが普通の社会民主主義者と違う。北の主張の方が現実的だとも言える。

Ⅱ　北一輝の社会変革運動への参画

＜　北一輝と中国革命＞

（１）社会主義者との交流の深まりと、中国の革命運動への接近

『国体論及び純正社会主義』が発売禁止になり、病気で寝込んでいるところに警察の手入れを受ける。借金が溜まり困難な状況に陥る。そうした時、以前から交流のあった幸徳秋水、

堺利彦など社会主義者との交流が更に深まる。

当時東京に、宮崎滔天を中心とする「革命評論社」があった。その他にも、中国の革命を推進する人たちの集まりである「中国同盟会」が 1905（明治 38）年には東京に出来ていた。そこに集まっていた孫文、宋教仁、黄興、張継などは皆、1911（明治 44）年に起こる辛亥革命の中心人物であった。したがって、辛亥革命は東京から起こったとも言われる。また、この人たちが神田の学生街に住んでいたことから、神田から起こったとも言われた。革命が起きると、神田にいた中国からの留学生が皆、学生服のまま中国に帰って革命運動に身を投じたため、日本人の着ていた学生服がそのまま中国の革命服になったとも言われる。

北は、日本の革命もさることながら、中国の革命運動を支援する宮崎滔天らの「革命評論社」に加わって孫文、宋教仁などの中国の革命運動を支援する活動を始めていった。また、幸徳秋水など社会主義者とも交流も深めていった。そうした中で、1910（明治 43）年に大逆事件が起こる。幸徳秋水などが天皇を暗殺しようとしたとして社会主義者が多く逮捕され、北も警察に拘引された。ただし、北は、「革命評論社」を通じて中国革命を支援する「黒龍会」[3]と近くなっていたため、そこから警察に手が回って北は助かった。

（2）中国の革命運動　―清朝崩壊へ

ア　中国の革命運動への参画

1911（明治 44）年、中国の武昌で清朝を倒す革命が起こると、北は「黒龍会」から派遣されて、中国革命の運動の中を上海から南京へと転進して行く。実際に青龍刀の下をかいくぐって武装闘争を行う。南京陥落の時は北も攻撃部隊に加わっている。

ところが辛亥革命[4]が起き、孫文らは南方をある程度支配したものの北方は支配できないままのところ、袁世凱が、孫文らの力が未だ及んでいないのに乗じてこの革命をいわば簒奪して大総統になる。革命を起こした孫文や宋教仁らには報われない結果になった。そこで、孫文や宋教仁らは 2 度目の革命を起していく。これが第二革命になる。その過程で、孫文と宋教仁の二大大立者の中、孫文に対抗していた宋教仁に北は親近感を覚えていた。

イ　孫文と宋教仁との路線対立

―アメリカ型連邦主義か、日中連携によるアジア主義か

孫文と宋教仁の路線の違いは何か。孫文も宋教仁も日本を頼りにしているが、孫文は基本

---

[3] 明治３４年１月、日清戦争後の三国干渉に憤慨した玄洋社の内田良平を中心として、葛生修吉らとともに設立されたもの。後の大日本生産党・大東塾をはじめ数々の右翼団体に大きな影響を与え、玄洋社とともに右翼の源流と言われている。

[4] 1911（辛亥）年に勃発した中国の革命。清朝を打倒するとともに，2000 年来の専制政体を倒し，アジアで最初の共和国を建設した。

的にアメリカの支援を受けて、アメリカ型の連邦政治を中国で実現しようとしていた。いわゆる武昌蜂起[5]が起きた時も孫文はアメリカにいて、中国に帰ってくるのに時間が掛かった。それに対して宋教仁は、北と考えが近く、アメリカなどの外国勢力に頼ることは干渉を招くことになるとして頼らず日本の倒幕・明治維新をモデルにした中央集権的統一国家作りを考えていた。このようにナショナリズム・集権主義の色彩が強い宋教仁とアメリカ型連邦政治を実現しようとする孫文が対立することになった。

ウ　孫文ら中国・第二革命蜂起、そしてその鎮圧

1913（大正 2）年、宋教仁が、袁世凱の派遣したテロリストによって暗殺された。北は、孫文が殺したと言い出し、孫文に殺された宋教仁の亡霊を見たとまで言い出した。日本政府は北の 3 年間の清国在留禁止を決め、北は日本に帰国する。北が帰った後に、袁世凱に対抗する第二革命が起きたが鎮圧された。北と親しかった中国革命の志士たち、黄興などが、次々と長崎や東京に亡命して来た。

エ　「対華 21 か条要求」に対する反発への対応に腐心

日本・大隈政府は、「対華 21 か条要求」を突き付け、中国政府に日本人を入れろなどと干渉がましいことを言い出した。世界で日本の評判を著しく悪くした。北は、このことを憂い、中国革命の中心人物、譚嗣同（たんしどう）を東京に呼び、大隈首相に会わせるなど、中国人から嫌われないようにと仲立ちを行った。

オ　第三革命勃発　―中国、軍閥割拠時代に

袁世凱自身が皇帝になって新しい王朝を作ると言い出した。これに対し革命派が第三革命を起こした。袁世凱はすぐ亡くなり中国国内は本格的に軍閥が割拠する軍閥割拠時代になった。

（3）中国革命と日本

ア　中国革命体験記『支那革命党及革命之支那』を上梓

中国の革命の最中、北は、『支那革命党及革命之支那』を書いた。これは後に『支那革命外史』という本になった。結局、北は生涯に主要な著書を 3 冊書いたが、1 冊目は『国体論及び純正社会主義』、『支那革命外史』が 2 冊目。この『支那革命外史』は、宋教仁に近かった北による中国革命体験記である。これは今でも中国革命史、辛亥革命史を研究する人にとっての必読文献となっている。自分自身参加した人間が書いたものとして貴重な内容が多い。ここで、北は、大正改元以降、日本が支那に加えた言動はことごとく不義の累積だと、日本政府の行ったことを批判している。また、「革命党が日本に援助を求めるのは日本民族

[5] 1911 年 10 月 10 日夜に起こった新軍内の革命派軍隊による、反清朝の 武装蜂起。ここから辛亥革命が始まり、翌年 2 月の清朝滅亡に至った。

の任侠的国風に信頼し、黄色人種の先覚者なるが故に、己の覚醒にも同情すべきを期待するものである」と述べている。

イ　中国人は、明治維新を尊敬し、任侠的精神の発露としての支援を期待

中国革命を行った人が皆、日本に期待を寄せるのは、明治維新を非常に尊敬しているからであり、その日本の任侠的精神の発露としての支援を期待しているからであると、北は強調している。任侠的の「侠」は、中国古代の書物、三国志にある「桃園の誓い」などの物語によって語り継がれており、中国でも非常に大事な価値観となっている。今日、日本では「任侠」という言葉はヤクザ映画などに使われるが、元来、中国から出てきた言葉で、困っている人を助けるという大事な価値観である。それを中国人は日本人に期待していることを北は強調している。それからフランス革命と明治維新と現在起きている支那革命は同質的なものだと強調している。

ウ　何れの革命も、下級青年将校の働きこそが成功の要因

中国革命で、最初の武昌革命が成功したのは、下級青年将校を中心とした軍隊が動いたからである。明治維新も下級武士が遂行し、最近起きたトルコの革命も青年トルコ党の働きによって成功した。青年を中心とした軍人が動くことによって国家が動くと北は強調している。そして支那とインドとトルコにより、これからのアジアは近代的自覚に覚醒していくことを強調している。こうして、北は中国革命に加わり、その体験を著して、日本の政府に中国革命を支援するように訴えた。そして 1916（大正 5）年に上海に渡航して、再び中国革命を支援しようとする。他方で、日蓮宗「法華経」の信仰がこの辺りから深化し、熱心な日蓮宗の信者になる。

＜　北一輝と社会変革＞

（1）社会問題の研究

ア　「老壮会」を創設し、社会問題を研究

中国革命が進行する状況の下で、日本では 1918（大正 7）年、「老壮会」が出来た。この「老壮会」を創るに当たって重要な役割を果たしたのは満川亀太郎と大川周明である。二人とも若い時に社会主義の影響を受けていた。しかし、一般の社会主義がインターナショナリズムを強調するのに対して、二人は、天皇をいただいた社会主義を考えた。第 1 回目の会合の参加者に、高畠素之、堺利彦、高尾平兵衛などの名前がある。これらは社会主義とかアナキストとか言われる人たちである。左右両翼の人がいたと言われ、老人、壮年、青年などいろいろな立場の人が集まって、皆で社会問題を研究しようという会であった。

イ「老壮会」が設立された背景―米騒動などの社会問題

社会問題研究会「老壮会」が出来た背景には、1918（大正 7）年に、米騒動が起きたこと

がある。米騒動は、軍隊が 10 万人も出動した大変な事件であった。第一次世界大戦で物価が非常に騰貴し、特にお米が高くなったことに怒った富山のおかみさんたちが起こしたものである。特に女性を中心に、日本中で暴動が起き、逮捕者が数万人に上った。どうもこれからは民衆が大量に政治の世界に登場する大変な時代を迎えるのではないかとの認識の下に集まったのが「老壮会」である。何回かの会合の後、大川周明と満川亀太郎の二人が、社会主義者と袂を別って「猶存社」[6]を立ち上げた。

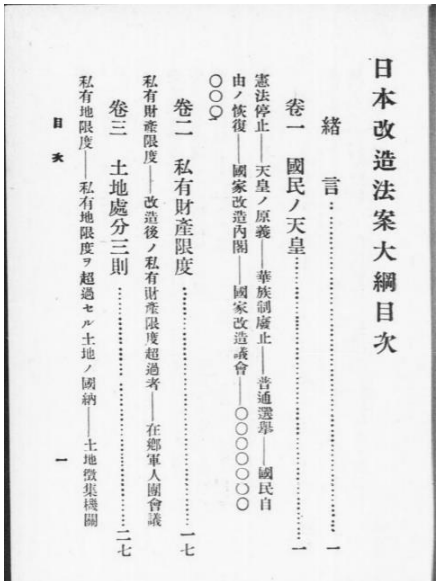
ウ　「道義的外交」、「アジア解放」などを謳う「猶存社」

「猶存社」の綱領で、大川と満川は、道義的対外政策を提唱するとともに、アジア解放のための軍事大国を目指した。ここには国内で平等主義を追求すると同時に、アジア主義的主張が盛られている。大川と満川は、この運動を強化するために、上海にいる北の力を借りようと考えた。満川は学生時代、北の『国体論及び純正社会主義』を読んで感動を覚えていた。1919（大正 8）年 8 月 8 日は大変縁起がいいと言って二人で喜び、上海にいる北を、大川が迎えに行った。

（2）社会変革の展望

ア　『国家改造案原理大綱』を執筆。日本国の改造を決意

北は、1919（大正 8）年、1 箇月断食をして『国家改造案原理大綱』を執筆した。当時、日本・大隈政府が「対華 21 か条要求」を中国に突き付けたことから、中国では猛烈な反日運動が起きていた。この時のことを北は次のように書いている。「ベランダの下は見渡す限り、故国日本を怒り憎みて叫び狂う民衆の大怒涛である。地上に生を受けたる者の多く返せざる矛盾、大矛盾ではないか。しかもこの期間において眼前に見る反日運動の陣頭に立ちて指揮し、鼓吹しおる者が、ことごとく十年の涙痕決死を共にせる刎頸（ふんけい）の同士その人々である大矛盾をどうする。自分は十有四年間の支那革命に預かれる生活を一放して日本に帰る決意を固めた。そうだ、日本に帰ろう。日本の魂のどん底から覆して日本自らの革命に当たろう。それには雑多に存在し、行動している本国の革命指導者にだけなりとも、革命帝国の骨格形成、構成の略図をでも提供する必要があるだろう。かくしてこの法案を起草し始めたのである。」これを書いている時に、大


日本改造法案大綱目次

緒言……一
卷一　國民ノ天皇……一
憲法停止――天皇ノ原義――華族制廢止――普通選挙――國民自由ノ恢復――國家改造内閣――國家改造議會――○○○○○○○○○
卷二　私有財産限度……一七
私有財産限度――改造後ノ私有財産限度超過者――在郷軍人團會議
卷三　土地處分三則……二七
私有地限度――私有地限度ヲ超過セル土地ノ國納――土地徴集機關

目次　一

『国家改造案原理大綱』改題
/国立国会図書館デジタルコレクション

6　「猶存社」は、唐詩選にある魏徵の詩の最後の「慷慨志猶存（こうがい志なおそんす）」と言って、慷慨というのは天下のことを非常に憂える、社会や国家のことを憂える気持ちがなお存しているに由来している。

川がやって来て、一晩語り明かした。大川は、北のこの 3 番目の主著『国家改造案原理大綱』の一部を持って帰った。北は、残りを完成させた上で、この年の暮れに日本に帰った。

イ　『国家改造案原理大綱』において、
言論の自由の保障、私有財産権の一部制限、教科書の無償化などを提案

『国家改造案原理大綱』は、内容に問題があるとして発売禁止になったが、その後、1923（大正 12）年に、危険な個所が伏せ字にされた上で刊行された。書かれている内容は、天皇大権を発動して議会を 3 年間停止する、その間に貴族院や華族制度などの特権的な制度を全て廃止する、また、治安警察法、新聞紙条例、出版法等、言論の自由を規制している法律は全て廃止する、全ての私有財産を廃止するという共産主義ではないが、私有財産権は一定限度制限する、あるいは会社等は国有化し統制経済とする、自作農を創って地主に苦しめられている小作農民を助ける、労働省を創って婦人や児童の虐待的取扱いを止めさせ、正常な労使関係の下で労働者の待遇を改善する。教科書の無償など児童の教育権を保護する、といったことを主張している。北は、これらは全て自分の独創だと言っているが、1901（明治 34）年に出た「社会民主党宣言」をかなり参考にした内容である。

Ⅲ　北一輝の思想の意味　―　国際平等主義と人類解放思想

（1）北の社会主義思想の特異点。それは、国内的平等主義と国際的平等主義の結合

北は多くの社会主義者と同じようなことを主張した。しかし、違う点がある。それは、日露戦争の後と同様、インドの独立と支那の保全を図ろうとする点である。イギリスやロシアは世界的に大富豪で大地主である。国内的に無産者や貧乏人が大金持ちに対抗して、労働者や農民のような地位を獲得できるのであれば、国際的に、無産者の地位にある日本のような弱小な国は、国際的な有産者で大金持ちのイギリスやロシアに対して開戦し、世界的正義のために世界的平等を実現すべきである。そして、新領土に、中国人や朝鮮人など弱小な人たちを招いて世界の白人支配を覆そうという、国際的な平等主義を主張した。結局、北の主張は、国内で平等主義を実現し、更に国際的にも平等主義を実現するというもので、当時非常に新しい思想であった。日本のナショナリストも明治時代にいろいろな主張をしたがこうしたものはなかった。

（2）「人類解放の戦士は日本人」として欧米帝国主義による世界支配に対する異議申し立て

「猶存社」は、機関紙『雄叫び』を発刊するなど本格的に活動を始めた。国内改革と対外政策を結合させるとともに、人類的視点を強調した。この『雄叫び』の最初に、「日本は今や国内的にも国際的にも奴隷解放戦を戦うべき時に達した。我々の頸血（けいけつ）はこの新しき歴史を過去の硯に注ぐべきである。吾々日本民族は人類解放戦の旋風的渦心でなければならぬ。

従って日本国家は吾々の世界革命的思想を成立せしむる絶対者である」と書いている。明治時代にはなかった、今までにない全く新しい主張となっている。そしてこの終わりに「我が神の我々に指すとこころは支那にある、インドにある。支那とインドと豪州の円心に当るアンナン（ベトナム)、ビルマ（ミャンマー)、シャム（タイ）にある。チグリス、ユーフラテス川の平野を流れるところ、ナイル川の海に注ぐところ、黄白人種の接攘するところにある。人類最古の歴史の書かれたるところは我々日本民族によりて人類最新の歴史の書かれるところではないか。我々は全民族を挙げてアジア 9 億の奴隷のために一大リンコルンにたらしめなければならぬ。」とある。日本は国内の平等を実現した後は、全世界の平等に進むべきだというのが北の主張である。世界のほとんどをアングロサクソン、白人が支配しているのは非常におかしい、それを正せというのが北の主張であった。

（3）「朝日平吾事件」に見る北的社会変革の主体の萌芽
―『国家改造案原理大綱』の広がりとその影響

北の主張が東京帝国大学、早稲田大学、拓殖大学、第五高等学校などに広まり、各地に学生の支部が出来、次第に多くの支持者を獲得していく。そうした中で、1921（大正 10）年、「朝日平吾事件」が起きた。『国家改造案原理大綱』の影響を受けた最初の大きな事件であった。北の『国家改造案原理大綱』に感化された朝日平吾という青年が、安田財閥の当主の安田善次郎[7]のところにやってきて、貧乏で困っている労働者のために安い宿泊所を作れと要求したが、安田が断ったところ、その場で刺し殺して自分も死ぬという、非常にショッキングな事件である。この時の遺書が 3 通あって、北のところにも一通宛てられていた。明らかに北の影響によって起きた事件であった。北は「故朝日平吾君が一資本閥を刺して自らを屠りし時の遺言状がこの法案の精神を基本としていたからとていささかも失当ではない」と言っている。

朝日はまた非常に熱心な天皇崇拝者であった。当時、天皇は支配体制の伝統的なシンボルだった。しかし、その新しい意味転換がこの大正中期から後半に掛けて起こった。つまり天皇をいただいて変革することで、天皇が支配のシンボルから変革のシンボルに変換した。このことが「朝日平吾事件」で明瞭に表れた。当時ある人が朝日のことを生半可なインテリ層の代表と言ったが、この生半可なインテリ層が日本の歴史に登場してきて、非常に大きな影響力を及ぼしていくことになる。

「朝日平吾事件」が起きる中で、北は、下級の青年将校たちが辛亥革命の時に中心になったことを勘案して、それを非常に重要に考えていた。北は『支那革命外史』に、暖衣飽食に慣れた佐官級以上の者はおよそ革命運動に値しないという趣旨のことを書いている。つま

---

[7] 安田 善次郎（やすだ ぜんじろう、天保 9 年 10 月 9 日〈1838 年 11 月 25 日〉 - 大正 10 年〈1921 年〉9 月 28 日）は、富山県富山市出身の実業家。幼名は岩次郎。安田財閥の祖。東大の安田講堂を寄附

り軍隊の上の方にいくと、既存の支配階級と妥協してとても変革は実行できない。下級の青年将校は、兵隊と日夜接しているのでその苦しい状況が分かり、革命運動に一番向いていると書いた。

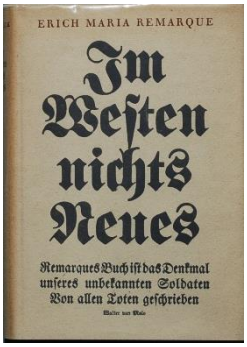
Ⅳ　第一次世界大戦後の社会不安と国家改造への動き

（1）軍縮の動き、その諸相

ア　第一次大戦後、軍縮の動きが強まり、軍人受難の時代が到来

1920 年代の後半は、北の主張が説得性を増すことが起きた。1922（大正 11）年に山梨軍縮、1925（大正 14）年に宇垣軍縮があった。第一次大戦があまりにも酷い戦争で、大変多くの死者が、特にヨーロッパで出た。世界中で軍縮をしないといけない、軍人は無用の長物であると言われるようになる。世の中は軍縮時代になる。

『西部戦線異状なし』が世界的にベストセラーになり、映画も作られて世界中の人が見た。日本でも軍縮が行われ、総計 96,400 人の軍人の首が切られた。二等兵の人は首を切られても何ともない。徴兵制で無理やり軍隊に徴兵されている人が元の職業に戻るだけだ。しかし、問題は将校である。将校は陸軍士官学校などで職業軍人になるための教育を受けて軍人になっているため、首を切られると就職先がない。当時は社会保障制度が十分でないから、首を切られたらそれまでとなる。ついこの間まで中佐でいた人がセールスマンになって、保険のセールスをするなど非常に哀れな状況になる。そうしたことが新聞記事にしきりに出てくる。



『西部戦線異状なし』
1929 年発刊の初版表紙
H.P.ハーク, CC BY 3.0,
via Wikimedia Commons

そのようにして辞めさせられた軍人が『嗚呼、軍縮』という本を書き、大いに売れたりする。特に陸軍士官学校などに行っている青年将校たちの間で、自分らの将来に対する不安が巨大なものになってくる。陸軍省など東京の官庁に勤める人たちの靴には馬に乗るための拍車が付いている。ところが電車に乗ると他の乗客に当たって嫌がられ、いじめられたりする。そこで登庁するときは普通の背広を着て登庁し、陸軍省に行ってから制服の軍服を着る。帰りは、また背広を着て帰るという状況になった。大変な軍人受難時代がやってきた。軍人を志望している人で陸軍士官学校を途中で辞める人がたくさん出てくる。

イ　青年将校に期待を寄せる北。北の思想に惹かれる青年将校

後に青年将校運動の中心人物になる末松太平が、ある時、北のところに行くと、北は隻眼を光らせて言った。「今の日本を救いうる者は、まだ腐敗していないこの軍人だけです。しかも若い貴方方です。」こういう形で青年将校たちが北の家を訪れ、北の思想に惹かれていくことになる。

ところで、共に国家改造運動に取り組んできた北、大川などであったが、「猶存社」の 2

大巨頭となった北及び大川は大正の終わり頃になると激しく対立した。大川は、もともと東京帝国大学の文科を出てインド哲学を学び、満鉄に勤めた人で、常にエリートの道を歩いていた。したがって大川は、参謀本部で講演したりして佐官級、いわゆる中佐、少佐、大佐といった軍の上の方に結び付いていく。それに対し、北は、うさんくさい右翼という感じで捉えられた。相対的に貧乏な北は、尉官級、いわゆる少尉、中尉、大尉などの青年将校に接近することになっていった。

（2）政治腐敗、経済恐慌

ア　普通選挙制度の導入と政治腐敗の進行

1920 年代の後半は、日本で初めて政党政治が始まり、本格的な普通平等選挙制が実現された。25 歳以上の男性のみとはいえ普通平等選挙制が導入された。その結果、あまりにも選挙にお金が掛かるようになった。制限選挙制であれば誰が投票するのかは、かなり見えるので、あそこにお金持っていけばいいとかがはっきりする。しかし、普通平等選挙制になると、有権者があまりにも多くなり、買収とか饗応とかは減ると考えられ実施したのだが、逆に、それによって有権者に向けて大量の賄賂や饗応が行われることになる。お金が要るから政党はいろいろなところからお金をもらうようになる。このようにして、普通平等選挙制が出来た頃は、ものすごい数の疑獄事件や売勲疑獄が起きた。勲章やるから金寄越せと言って金を取るといったみたいなひどいことがたくさん起きた。それで政党政治は良くないとの考えが国民の間で強くなった。

イ　世界恐慌の襲来。惨状を呈すドイツ、そして日本の経済社会

浜口内閣の時にアメリカのウォール街で株が暴落し、世界恐慌が襲ってきた。一番酷い目に遭ったのは、アメリカ資本に頼っていたドイツで、失業者が 600 万人にも上った。ドイツにおいては、共産党とナチスという 2 大左右両翼の政党が台頭してきた。結局これが、ナチス、ヒトラーの支配につながる。

日本も大量の失業者が出て、不景気でデフレが進行する。『大学は出たけれど』という映画がはやり、大学を出ても就職先がない大変困った時代を迎えた。当時大学には 18 歳人口でほんのわずかしか行っておらず、大学生は大変なエリートだった。にもかかわらずそのような状態であった。また、東北地方の農村では、身売りが見られる状況になった。

末松太平の回想記に、「実の父親は満州の前線にいる息子に死後、国から下がる金がほしいから必ず死んで帰れという手紙を送ってくる。そして実際そうした遺骨が各連隊に返ると連隊の営門の前で遺族たちが金ほしさにその遺骨を奪い合う。」状況になってきたとある。兵隊たちを毎日指揮している青年将校の間で、今の日本はこんなことで良いのかという気持ちが強まって、北らの国家改造運動に加担する人が増えてくる。

（3）クーデターの発生

ア　相次ぐクーデター未遂事件

国際的な関係、特に中国との関係が非常に悪化して、満州事変などいろいろな事件が起きる。まず 1930（昭和 5）年 9 月、参謀本部第二部ロシア班長でトルコに駐在武官として赴任していたと橋本欣五郎が、トルコのケマル・アタテュルク[8]の変革を見て、トルコの変革は明治維新をモデルにしているのに日本は何をしているかと、「桜会」を結成し、「国家改造をもって終局の目的とし、これがため要すれば武力を行使するも辞さず」と主張する。このイデオロギーブレーンは大川周明であった。以後、「桜会」に関係する 2 つのクーデター未遂事件、「3 月事件」、「10 月事件」が相次いで起きる。何れも大川が関係していて、佐官級以上の人がクーデターを起こして政権を奪取しようとするもので、前者は当時の陸相、後者は荒木中将に大命を降下[9]させるという事件であった。10 月 17 日、10 数名が憲兵隊に保護されたが、旅館等に軟禁されたのみで、全然厳しい処断が下されなかった。

西田　税
Public domain,
via Wikimedia Commons

このクーデター未遂事件に関わることにもなった青年将校たちの中で、西田税（みつぎ）[10]という人が北のところに来るようになっていた。その影響で末松太平なども来るようになった。西田は青年将校たちのとりまとめ役で、他の青年将校たちと行動を共にし、クーデター計画に加わっていた。この佐官級の人たちによる、大川の関係するクーデターは、何時も料亭のようなところで計画が練られている。自分では明治維新の志士の再来だとか言っているが、本当にまじめにやる気があるのかと疑問を感じて、西田らは、佐官級の人と決別していく。

イ　クーデターに参画した人たちの社会層

「3 月事件」、「10 月事件」の前、1931 年 8 月に、そのクーデターに参画した人たちが、東京・日本青年館に集まり、「10 月事件」に向けて、「郷詩会」という名前の会合を開いた。ここに集まったのが、北一輝、西田税（みつぎ）系統にいる青年将校、それから農村と下町の青年たちを集めた井上日召たちの血盟団というグループ、近代資本主義文明に根本的に疑問を持って電気を中心とした近代文明は根本的に人間性に反していると主張していた第一高等学

---

8 オスマン帝国の将軍、トルコ共和国の元帥、初代大統領（在任 1923 年 10 月 29 日 - 1938 年 11 月 10 日）。トルコ独立戦争とトルコ革命を僚友たちとともに指導したことで知られる。

9 大日本帝国憲法下で、天皇が元老や重臣などの助言などに基づいて、内閣総理大臣の候補者に組閣を命じること

10 昭和前期の国家改造主義運動のリーダー。鳥取県出身。1922 年陸軍士官学校卒。陸士在学中に北一輝の軍隊による国家改造論に深く共鳴，北のいた猶存(ゆうぞん)社に参加。

校を中退して茨城の農家に帰っていた橘孝三郎[11]が創った愛郷塾の塾生たちである。

ウ　「血盟団事件」、「五・一五事件」を巡ることの顛末

「郷詩会」に集まった人たちが、1932（昭和 7）年に実際に行動を起こしたのが「血盟団事件」と「五・一五事件」である。「血盟団事件」では金融資本の中心にある三井合名会社理事長の団琢磨と前大蔵大臣の井上準之助が暗殺された。「五・一五事件」では犬養首相が暗殺された。特に橘孝三郎が代表を務める「愛郷塾」の人たちは、東京の変電所を襲撃して夕方 5 時に行動を起こした。夜間に変電所を襲撃して東京を暗黒にすることにより、現代文明の弊を悟らない現代の東京人に反省を促す狙いがあった。こうして「五・一五事件」は起きた。

だが、陸軍の青年将校はこのとき動かなかった。陸軍の青年将校たちは非合法手段に訴えなくても、陸軍大臣荒木貞夫[12]を中心に、合法的に自分たちが支援している農山漁村を救えると考えていた。ところがそれが上手くいかなくなる。

（4）国家改造への動き

ア　国家改造を巡る陸軍内部の抗争

荒木貞夫及び真崎甚三郎系の九州閥が陸軍にあり、長州閥と戦っていた。もう一方で、陸軍には、第一次大戦を踏まえて総力戦に対応できるように陸軍を作り直さなければいけないと主張する永田鉄山を中心にした中堅幕僚の「一夕会」という集団があり、九州閥と交流していた。こうした事情の下で、1931（昭和 6）年 12 月に犬養内閣が発足し、荒木貞夫が陸軍大臣になった。

「五・一五事件」が起きた頃、青年将校たちはこの荒木陸軍大臣を中心に合法的に自らが考え、また、北が考えている国家改造構想を実現すればいいと思った。しかし、この荒木が陸軍大臣になると恣意的な人事を行い、また、大蔵大臣の高橋是清は緊縮財政の立場から農山漁村の救済に一向に手を打たなかった。

荒木陸軍大臣に関しては、一番上に荒木貞夫、真崎甚三郎という九州閥の将官がいて、その下に永田らのグループがいて、一番下に青年将校が支えている構造であった。しかし、永田を中心とした人たちは、荒木を上にいただいていてはだめだということで、自分らで第一次大戦から学んだ総力戦体制に日本を誘導しようとして「高度国防国家」を作るための研究会を 1933（昭和 8）年の秋頃に作った。これが統制派と言われる人たちである。

---

[11]国家主義運動家。茨城県生れ。農本主義を唱え，1929 年水戸市郊外に愛郷(あいきょう)会，1931 年愛郷塾を創立して青年を指導，五・一五事件には塾生を率いて参加し捕らえられた。

[12] 陸軍軍人。大将。陸相・文相。東京生まれ。皇道派の中心人物。革新的反共論で青年将校に支持され，二・二六事件では同情的態度をとり，事件後予備役編入。戦後 A 級戦犯となり終身刑。

イ　陸軍中央と青年将校との対立

青年将校の方は、統制派的な高度国防国家思考には賛成できなかった。その理由は、青年将校の主張は、北の構想しているとおり日本国民自体を救済するのが目的であって、戦争は二の次である。それに対し、佐官級以上の人たちの主張は、戦争に向けて日本国家を作り直すということであり、目的が根本的に違う。

1933（昭和 8）年 11 月、この両グループが偕行社で会合を開いた。青年将校の方が、軍中央部は我々の運動を弾圧するつもりか、北の日本改造法案的な方向を弾圧するのかと聞いた。それに対して佐官級の人々が、「そうだ」、今後、軍中央の方針に従わなければ君たちを断固として取り締まる、政治運動やるなら軍服を脱いでやれと言う。

1933（昭和 8）年 3 月、永田が軍務局長に就任し、その年の秋に『国防の本義とその強化の提唱』というパンフレットを出し、国防国家を作り、日本を総動員体制に誘導しようとした。その年の 11 月には陸軍士官学校事件[13]が起きて、北、西田らの影響下にあった青年将校運動の中心人物、磯部浅一、村中孝次らがクーデターを練っているとして、彼らを陸軍から追放した。永田は、統制派と呼ばれるようになり、次々に、荒木、真崎ら皇道派の将官を陸軍の必要なポストから追い、終に陸軍 3 長官の一つである真崎教育総監も 1935（昭和 10）年 7 月に辞めさせた。こうして真崎が辞めさせられ、青年将校の中心人物も首になる。統制派が我々に弾圧をかけてきているとして、相沢三郎中佐[14]が永田鉄山少将を陸軍省軍務局長室で斬殺した。これが相沢事件である。

（5）北一輝と「二・二六事件」

ア　「二・二六事件」発生の背景と顛末

こうして統制派と皇道派の対立は、激しくなっていった。折から 1935 年 12 月、青年将校の多数派がいる第一師団が満州に派遣されることになった。満州で死ぬぐらいなら、それから相沢中佐が身を挺して永田局長を斬った、我々自身も犠牲になって国家の変革をやらなければいけない、ということで起こしたのが 1936 年の「二・二六事件」である。結局クーデターは失敗し、青年将校たちの裁判の判決が 7 月 5 日にあった。17 名が死刑となり、7 月 12 日に大多数の青年将校が銃殺された。

「二・二六事件」
カメラマンに銃口を向ける兵士
Public domain, via Wikimedia Commons

[13] 1934 年 11 月，皇道派の青年将校が陸軍士官学校生徒を扇動してクーデターを計画したという容疑で逮捕され，軍法会議にかけられた事件。

[14] 日本の陸軍軍人。皇道派に属した相沢は、真崎甚三郎教育総監更迭に憤激し 1935 年 8 月 12 日に統制派の永田鉄山軍務局長を殺害した（相沢事件）。

イ　北の死刑判決。その最後の姿

北、西田の裁判はその年の 10 月から開始される。北は『日米合同対支財団ノ提議』という文章を書き、日本の仲介によってアメリカ資本を中国に入れて、悪化している日中関係の改善を図ることを考えていた。そのために中国に行くつもりだった。当時、辛亥革命を共に戦った人物が中国の外務大臣に当たる仕事をしていた。2 月の総選挙を避け、3 月に行くつもりだった。ところがこの「二・二六事件」が起きた。

北は、仕方がなく手助けはしたものの中枢部ではなかった。しかし、裁判では死刑が決まった。北・西田裁判のために死刑が延期されていた磯部、村中と一緒に 1937（昭和 12）年 8 月 19 日に銃殺された。この時、北は、磯部らから天皇陛下万歳三唱をやりましょうかと言われて、いや私はやりませんと言ったという話がある。これは正確には「その時、西田さんその他から一同で万歳を唱えましょうと言われると北先生はそんな形式的なことはいかがかと思うから私は唱えませんと申されましたので、皆誰も唱えませんでした」との説明がある。別に万歳三唱をやりましょうかと言われて嫌ですと言ったわけではなく、形式的なことだからやらないと言ったのが事実のようである。

おわりに　―　北一輝の「遺産」

ア　議会政治尊重の重要性

こうした非合法的な社会変革手段が今日では否定されるべきことであることは言うまでもない。議会政治が行われている国ではすべての政治変革は選挙・議会を通して行われるべきである。北も最初の『国体論及び純正社会主義』ではそう主張していた。それが中国革命の体験を通して変化していった。そのことを前提として現実の動きは見ていかなければならない。

イ　『国家改造案原理大綱』（改題『日本改造法案大綱』）と戦後の民主化施策

北や青年将校は処刑されたが、昭和 10 年代からさらに 20 年代まで、連続して、日本では平等主義的な施策が次々に行われていった。農林省を中心として小作人の地位向上策がとられ、自作農が創設され、戦後の変革で更に自作農は圧倒的に増える。厚生省が 1938（昭和 13）年に設置され、保健所が出来、妊産婦手帳が創設され、国民健康保険制度も出来る。労働者年金、その他いろいろな保険制度が大体戦争中に出来ている。食糧管理制度、配当制限も昭和 10 年代に出来ている。これがさらに戦後の財閥解体や農地解放等の民主化施策に連続していく。これを実行したのは革新官僚と言われる人たちで、この人たちの中には北の『日本改造法案大綱』を読んでいる人が多かった。これは北の思想が明治以来の社会主義思想とつながっているからでもあった。

ウ　北の予言

革新官僚として岸信介が商工省にいたのが典型で、更にそれが戦後の財閥解体や農地解放の民主化につながっていった。戦後生きていた元青年将校、末松太平は、青年将校がやり残したことをマッカーサーがやり遂げたのは全く皮肉だと、言っている。北自身は銃殺刑の前日、弟子の馬場園義馬に「「改造法案」を実現するためにはどうしても自分たちの犠牲が必要なのだ。国家はここ 10 年ばかりの間に急変するよ。必ず大体「改造法案」のようになるからそのつもりで。」という風に言って死刑になっている。北自身は処刑されたが、北の思想はその後の日本において実現されていったとも言える。

末松太平と渋川善助
「私の昭和史」著者:末松太平/みすず書房

質疑応答

Ｑ１　「二・二六事件」の原因をどう考えるか。避け得る方途はあったのか。
Ｑ２　現代は、北一輝の思想をどう評価すべきか。
Ｑ３　北一輝が、現代日本に語り掛けているものは何か。
Ｑ４　北一輝の思想は、何によって育まれたか。
Ｑ５　北一輝の活動に影響を及ぼしたものは何か。
Ｑ６　北一輝は、自伝などで自分自身をどのように語っているのか。
Ｑ７　生誕の地「佐渡」は、北一輝にどのような影響を及ぼしたか。
Ｑ８　革新官僚「岸信介」は、北一輝から如何なる影響を受けたか。

Ｑ１　「二・二六事件」の原因をどう考えるか。避け得る方途はあったのか。

「二・二六事件」の遠因に、軍における人事の失敗で軍人の暴発を招いたとの話があったが、大軍縮の中で、例えばどのような選択が他に有り得たのか。

（筒井）

軍縮を行うのであれば、首になった職業軍人の手当を考えてやればよかった。ところが大正期には、現在のような社会システムが出来上がっていなかった。世界の大勢が軍縮に向かっていると新聞などが言うと、首になった軍人をどうするかを考えずに、後先考えずそちらに向かう。日本は、大正中後期以後も同じことを繰り返す。これは典型的な失敗の一つである。

実はその後、その逆が起きる。満州事変以降、非常に緊張が高まってきて戦争が始まると、今度は、そうだ戦争だとなる。それは同じ現象の裏表である。片方は軍縮であり、片方は戦争の拡大であるが、あまり深く考えずに、特に新聞の主張がある方向に向かうと、それに押されてしまう。大事なことは、マスメディアはどういう方向に大衆を持って行こうとしているかを絶えず注意深く意識しておくことだ。

メディアリテラシーと言うが、どういう風にマスメディアが世論を誘導するかに対して、一般の国民が広くあらかじめ知っておき、ある方向に、ある新聞、あるいはあるテレビ局が大衆を煽っていると気が付いたら、違う意見もあるということを、テレビなり新聞なりに出し、判断は国民自身がすることが大切である。

いろいろな意見を新聞が我々に提供してくれれば、大正時代でも、だいぶ違っていたと思う。まだまだそれが非常に弱い。アメリカにも特定の方向に向かうテレビ局がないわけではないが、多様な意見を読者に提供して、新聞の場合、あるいはテレビは、今まで記録に撮っているビデオを見せて、今そう言っているけど、かつてこうだったではないかと示している。そうしていけば相当変わってくると思う。日本はそれが大変弱い。

それからテレビ局と新聞が朝日系なら朝日系、読売系なら読売系というふうになってい

るのも先進国では日本だけだ。テレビが新聞を批判したり、新聞がテレビを批判したりことができないようになっている。それを全体で変えていけば、現在でも相当変わってくると思う。大正時代は、まして、ある方向へどっと行き易かった。人事うんぬんよりも、マスメディアやそれに煽られる国民がどっと特定の方向に行かないことが大事ではないかと思う。

Ｑ２　現代は、北一輝の思想をどう評価すべきか。

松本清張の『北一輝論』での北の評価はあまり良くなかったとの印象がある。現在は、北一輝の思想には、戦後の平等主義を普遍化する契機があったとの評価に変わっているのか。IS（イスラム国）などの出現で、今後、民族主義、国家主義がクローズアップされてくるのではないかという感覚があるがどうか。また、三島由紀夫事件は北と何か関わりがあるのか、いわゆる国家アイデンティテイーとの関係についてはどうか。

（筒井）

松本清張の『北一輝論』が出版された 1970 年代は全共闘運動が終わった頃で、北一輝ブームが学生などにあった。何故かと言うと、戦後の左翼運動は、インターナショナリズムでやってきたが、何となくインテリだけが何か言っている。普通の大衆と違うところにある。もっと日本の大衆に根付いた運動でないとダメではないかということから、当時、ネイティブに近いものが見し直される傾向があった。一方では柳田国男などの評価が非常に高まり、他方で北一輝型の思想も大事なのではないかと言われ持ち上げられた。

そうした時に、松本清張は、北一輝のことを嫌いだけれど書いたという感じである。それであの本は、北一輝をいろいろ批判している。でも松本清張はその後、テレビ番組に取り挙げられた原作も作っており、しかも『昭和史発掘・二・二六事件』などでは、何か魅力をも感じていたとも思う。

三島由紀夫のことについては、三島が 10 歳ぐらいの時に「二・二六事件」があって、それで日本のある種の、非常に大事なものがなくなったという意識が非常に強かったようだ。『英霊の声』という本を書いている。この本には「二・二六事件」の青年将校と特攻隊の幽霊が出てきて、天皇の人間宣言を批判する内容がある。三島は「二・二六事件」に非常に惹かれていた。三島がそういう方向で作った『憂国』という映画もあるが、バタイユの影響を受けての作品である。青年将校が日夜汗にまみれて訓練しているにも拘らず、兵隊の家族が食うや食わずの状況にある。このままでは日本は危ないのではと意識している。汗まみれの青年将校を想い、青年将校が決起したことに対し、三島は自分の美学から、それを好ましいと思った。その方向の下に、実際に起きたことを合わせて表現した面が強い。

三島が決定的に影響を受けたのは谷崎潤一郎である。谷崎潤一郎の考え方は、文学者は生き方すべてが芸術でなければいけないという考えだった。それを三島はああいう形で全うしたと思う。美輪明宏さんの回想によると、美輪さんと一緒に話していたら、誰かが三島の隣に立って何か言っていると言うので、美輪さんが磯部ですかと聞いたら、ああそうだ、磯部だと言った。三島は磯部の亡霊を見たことになっている。美輪さんの作った話かも知れな

いが、三島は青年将校に自分の美学から憧れを持っていた。

世界的な民族主義の高まりの中での日本の国家主義との関係については、確かに、特にイスラム教が持っているものが世界的に大きな影響を与えている。自爆テロも行われているため、日本の北一輝の時代のテロリズムもそれとの関連で見られることがあるが、私は相当質が違うと思っている。日本の場合、血盟団の人は自分が殺した人のところにお墓参りをするなどしている。世界的にテロで殺した人の相手のところにお墓参りに行っているテロリストの話は聞いたことがない。別に良いと言っているのではないが、日本のテロリズムは相当、日本的なもので、IS の自爆テロやナチスの殺伐とした行為とは違う独特のものがあるのではないか。

特に血盟団の人の場合は、仏教的なものが入っていて殺人は如来の方便だと言っている。井上一召は、維新運動は「行」の一つだと言っており、外国のものとは違うのではないか。別に彼らを弁護しているわけではないが、その点で現在、世界で起きているテロと日本のこの時期のテロは違うのではないか。殺人自体、良くないのだから弁護しているわけではないが、そういう違いは感じている。

Q３　北一輝が、現代日本に語り掛けているものは何か。

北一輝は必ずしも「二・二六事件」の将校たちに同情しているわけでもなくて、ただ相手が崇拝しているから、結局、自分が責任をとったということか。

一方で昭和の超国家主義、国を超えるという概念は、資本主義の終焉と歴史の危機が言われ、資本主義と国家、あるいは民主主義と国家の関係が問われている今の日本の状態において、日本が世界にどう対応できるかと考える際の拠り所として、北一輝の思想に近いものが、IS の人たちと違う意味で、影響を持っているのではないか。一神教と他神教の差はあるが、日本の未来を拓くよすがになるのではないか。

北一輝の超国家主義は、「二・二六事件」ではなくて、もっと先を見ていたのではないか。今の日本について、北一輝はどういった発言をするのであろうか。

（筒井）

「二・二六事件」と北一輝について。「二・二六事件」は 2 月 29 日に鎮圧されるが、北は 2 月 28 日午後 6 時頃に憲兵隊の特高課長に逮捕される。その時、憲兵から「西田がいなければ貴方が憲兵隊まで一緒に行ってください」と言われたので、西田の代わりに逮捕されたと思っていた。従って北は事実に沿って裁判で以下のことを強調した。「私は決起将校らの背後におって、彼らを躍らし、私の理想としている改造を断行するためにいろいろ策動したのではないことは、ご了解くださると思いますが、なお、念のためにそのような関係ではなかったことを断言したいと思います。要するに直接行動には反対であるが、若い者が蹶起した以上、これをそのまま傍観するわけにはいかないので、少しでも彼らの為に有利になりかしと念願し、及ばずながら若干の意見も勧告し、その他若干努力をしてやったのであります。」しかし、求刑は死刑だった。この時、北はこう言っている。「誠にご道理あるご論告と

思います。判決では酌量減刑して死期を免じていただきたいと思いません。以前より事実さえ明らかになれば結構で、死を賜りたいと念願しております。また既に亡くなった蹶起将校に対しても」―もう銃殺されていた―「誠に申し訳ないと思っておりますので、只今のご論告は、神様のお情けであると感謝しております。私はただ一片の同情より彼らを庇護しようとして思ったのであり、事件の計画を立てたり、また彼らを使嗾(しそう)指導したのでもなく、共犯とは思っておりませぬ。しかしながら彼ら蹶起した者より見れば、私の一言は西田の十言、百言よりも重いわけで、この点において私が彼らにいろいろ話をしてやった責任を重かつ大なりと痛感しており、この責任を免れんとするものでありません。私は衷心より死を賜りたいと存じます。ただ願わくば、ご同情を持って私が不逞矯激をもっているということ、及び『日本改造法案大綱』をもって国体破壊なるということ、及び今回の事件は同法案大綱にのっとってやったことの 3 点を判決書に表していただきたくないので、特に申し上げておきます。」ということで、北は共同正犯的事実はあくまでも否定しつつ、いわば道義的責任を引き受けることを明言したといえよう。

北は、本当は、自分の関係した中国と日本の関係が悪くなっているのを改善するために中国に行くつもりだったが、自分の思想の影響を受けた青年将校がもう 10 数人銃殺刑になっているのならば、自分は責任をとって死刑を受ける、と言っている。これが大体の事実で、このことがあったために、北とその周辺の人は、これを見ていた人たちから非常に尊敬された。「北の銃殺の時、銃声とほとんど同時に、惜しい人を殺したと全場一語も洩れない緊張した黙々の間に、この一語が入場許可者の中から、嘆声混じりに漏れたのが聞こえた。独語者のみならず、在場した多くの者はこの独語に同感を持ったことであろう。」ということであった。北は本来、普通の裁判であれば、懲役 3 年か 5 年ぐらいの内容しかなかったのに、青年将校は自分の思想のためにことを起こして銃殺されたのなら、自分も死を賜りたいと言った。自分だけ免れようとするような人が、こういう時、非常に多い世の中で、それは立派な態度だったと言える。

「超国家主義」について。超国家主義は、日本語にはなかった言葉です。英語で ultra-nationalism という言葉があり、元来、極端な国家主義、ナショナリズムという意味で、戦後占領軍が持ち込んだ言葉です。ところが、1960 年代に丸山真男のお弟子さんで橋川文三という人が、筑摩書房から現代日本思想大系が出版された時、超国家主義という巻を作って、超国家主義者といわれる北一輝や、大川周明など代表的な超国家主義者たちの著作を入れ、その解説の中で、橋川さんは日本語の読み替えをやった。つまり超国家主義というのは、元来、ultra-nationalism で、アメリカ人の思いついた極端な国家主義だという意味であり、非常に極端なナショナリズムは国家間の対立の原因になり非常に困ることだが、基本的にナショナリズムが一概にすべて悪いのかとの考えもあり、超国家主義の「超」を読み替えて、極端というのではなく、北一輝とか石原莞爾などの思想もそうだが、ナショナリズムというのは、突き詰めていくと国家を超えていく、だから「超」という字を“極端”はなくて“超え

る”と読み替えた。

というのも、北一輝の『日本改造法案大綱』での主張は、白人が地球の大部分を支配しているのはおかしい。だから日本人や中国人などアジア人は、ペルシャとかアラビアの人たちと共に団結して、その植民地支配を突き返そうというものであり、この思想はナショナリズムを超えている。白人の世界支配を覆せというわけだから、日本人だけでいいということではない。「猶存社」の綱領にエスペラントの普及宣伝があるように、「猶存社」の北、大川、満川たちは、エスペラントという人工の世界語、そういうのを使うべきだと主張している。それはナショナリズム、日本人だけよければいいと言うのではない。橋川さんが行ったことは思想的に大変有意義で、超国家主義は必ずどこかで国家を超えるところがあるという主張になっている。それは現代でもいろんな問題を考える上で非常にヒントになると思う。

Ｑ４　北一輝の思想は、何によって育まれたか。

北一輝は先を見ていたと思う。北一輝が先を見るようになった教養に関して、自らの勉強の態度、あるいは勉強の在り方について如何か。

（筒井）

思想というものは、どこか空中に普遍的な良い考え方があったとしても、それを時代状況や、その人が住んでいる風土や、そういうものを無視してはほとんど成功しない。人間を白紙のものと見立てて、そこに良い考えを植え付けたら、それで人間も、その人の住んでいる社会も良くなるという考えは、いろんな経験からして、あまり良くないという考えが大事だと思う。

人間は、その人が生きている時代と環境に規定されたものだから、その状況に悪いところがあったら、あくまでその人の置かれた時代と環境に則った形で少しずつそれを変えていくという考え方が非常に大事だと思う。北一輝の場合には少し過激なところがあったが、全体としては当時の社会主義者が言っていたようなインターナショナリズムというのはなかなか現実には通用しないことを押さえた上で、いろいろな変革の考え方を出していったところが、やはりある程度成功を導いた原因だと思う。

大事なのは、我々が生きている社会は、時代と環境によって規定されていることをよく認識することだと思う。学校教育の内容を見ると、白紙の人間に良いことを教えたらその通りに変わっていくというふうに考えているところがあると思うが、それは人間の持っている制約性やある種の限界についての無理解によるもので、結局うまくいかない原因であると思う。

Ｑ５　北一輝の活動に影響を及ぼしたものは何か。

北は、17 歳で佐渡中学を退学し、次の年に上京し、そして社会主義研究を開始する。ここにギャップがある、一つ飛んでいるような気がする。東京へ出て、18 歳で一つものごとを起こそうとすると、それまでの間に漢文を非常に勉強したとか北一輝が育った環境の影

響があると思う。その背景についてはどうか。

（筒井）

私的生活まで話すのも何だが、実は失恋がある。失恋するとよく何処かに旅行に行ったりする。失恋は、10 代ぐらいにとっては非常に重要なことで、芥川龍之介とか文学者にとっても非常に決定的なトラウマになる。北の場合は、親も了解して出ていく。親にしてみたら、失恋であんまりくよくよしているよりは、社会主義でも何でもいいから勉強してくれるとよかったということはあったと思う。

Ｑ６　北一輝は、自伝などで自分自身をどのように語っているのか。

学生時代に末松太平の自伝、『私の昭和史』を読んで感銘受けた。自己省察というか、とても深い内容が書かれている。私たちがイメージしている青年将校とかけ離れているような気がしたが、北一輝自身は自分のことを語った自伝のようなものは残しているのか。

（筒井）

末松太平さんは文学者のようで、この大正後期の青年将校が、いかに教養があったかを物語っている。文章が非常によく書けていて、徳富蘆花の影響を受けている。徳富蘆花には軍人のこと書いた小説もある。青年将校たちの内面は、この末松太平さんの『私の昭和史』（中公文庫上下２巻）でよく分かるが、北は、獄中でいくつか短い文章を書いているが、残念ながら自伝はない。大川周明には『安楽の門』という自伝がある。これは、自分の思想を中心にした回想を戦後、A 級戦犯になるが精神病だということで結局無罪になって出てきた後に書いたもので、非常に優れた本である。普通の人が一生かけてやるようなキリスト教とか、マルクス主義とか、いろんな宗教をずっと遍歴して、大体、大学卒業するまでにほとんどの思想遍歴をやっている。そんなことが非常によく書かれた本である。だけど残念ながら北一輝にはない。

Ｑ７　生誕の地「佐渡」は、北一輝にどのような影響を及ぼしたか。

松本健一さんが『若き北一輝』で、佐渡コンミューンということを書かれていた。佐渡に育ったことが北一輝に影響を与えたと思うが、失恋以外に佐渡という土地で、北一輝が影響を受けたことは他にないのか。

（筒井）

北一輝の周辺にいた人の中には、北の書いたものを読んで、自由党が明治政府と戦った時にお前のような人がいたらよかったのに、と言った人もいる。佐渡にいた北は、自由民権運動で活躍した人の影響を受けている。板垣退助に東京で会って、自由党にお前が欲しかったと言われている。

あと、佐渡との関連では、一般的なことであるが、首都から離れたマージナルな孤島のようなところの方が疎外されている分、中央に対する、権力に対する反抗性と、また権力への憧れというのが非常に生まれやすい。そういう離島とか、離れた所で生まれた人のことをマ

ージナルマンと言うが、そういう人が強烈な反権力と強烈な権力志向、だいたい反権力が強いということは権力志向が強いとことの裏返しであるが、それを非常に持ちやすい。北にも、佐渡という離島にいたから、そういうことがあったと思う。ナポレオンもそうである。フランスの中心から離れたコルシカというところから出ている。それからあまりいい例ではないが、ヒトラーもベルリンではなくリンツというドイツの中心から非常に離れたオーストリアの片田舎から出ている。結局、中心から離れたところから、巨大な権力志向とまたその裏返しの反権力志向が生まれるということがあると思う。

Q８　革新官僚「岸信介」は、北一輝から如何なる影響を受けたか。

革新官僚としての岸信介が、大正時代に改造法案を読んで北に影響を受けたとあるが、1点目はどういう点で影響を受けたのか、2つ目は、現在の安倍首相はどういう影響を受けているのか、つながりがあるのか。

（筒井）

岸信介に関しては、結局、資本主義の普通の自由主義経済を放置しておくと必ず、今、アメリカがそうなっているように極端な富が、例えば国民の5%とかに集中して、大多数の人が貧困になるから、それは絶対よくない。経済に対して何らかのコントロールをしないといけないということで、ある種の統制経済をやる。岸は商工省にいたが、昭和 15、16 年頃、いろんな統制施策が出来て、資本と経営の分離とか、戦後の日本の資本主義が取り入れるような、ある程度中央政府が経済をコントロールすることを、岸は中心人物の一人として行っている。

戦後、A 級戦犯容疑者から復帰して、岸が首相になった後の経済政策を見てみると、大体、当時の自民党の中では、一番政府によるコントロールの色彩の強い社会保障制度的政策を岸は行っている。今でも、アメリカの影響を受けて非常に極端なまでに自由主義の方が良いと考える方が日本に結構おられるが、岸はそれと対立するような考え方を自民党の中では持っていた。

安倍さんについては、何とも言えないが、ある人の言うのが正しいとすれば、かなりお祖父さんの影響を受けて、3つの矢とかいろいろな経済政策、かなり政府のコントロール色が強い今の経済政策としてアベノミクスと理解するとすれば、岸信介的なものがあると言えるかもしれない。しかし、それが成功しているかどうかは別の話である。

自らの思想を鍛えるとは、批判的に学ぶこと

北一輝は近代日本が生み出した最大の思想家の一人です。思想というものは現実に肉薄しなければ存在する意味がありませんが、そういう意味で北は時代の課題と切り結んだ本当の思想というものを作り出した人といえるでしょう。こうした思想家として、近代日本においては、福沢諭吉・中江兆民・井上毅・犬養毅・石橋湛山らがあげられますが、北ほどの人はなかなかおりません。日本に多いのは欧米の思想を紹介したり解説したりする人で、ここに名前をあげた人たちはそれに留まりませんでした。

北は世の中を理想の方向に向けて変えていくこととそれに現実性を持たせることとの両方を考えて実行していきました。前者のみの理想論を説く人は多いですが、実現できない理想はいくらでも語られますから結局人をだますか無責任なだけです。一方、現実的に可能なことを説くだけの人はほとんど何も変えることはできないでしょう。人間は理想なしに向上することはできませんから大きな理想は必要なのです。そして、両者を兼ね備えた人が真に偉大なのです。

北は思想の実現のため色々な方策をとりましたからその中には今日から見ると色々批判されるべきところもあるかも知れません。それらも含めて学んでいきたいと思います。“学ぶ”とはそういうことです。

現代に生きる皆さんにはむずかしいところもあるかも知れませんが、こうした思想家に接するところから自分の思想も鍛え上げていってもらいたいと思います。

2017 年 6 月 1 日制作

編集・制作　公益財団法人国際高等研究所
ＩＩＡＳ塾「ジュニアセミナー」開催委員会

監　　修　池内　了　猪木武徳　佐伯啓思　高橋義人

ISSN 2759-0585

満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
（国際高等研究所庭園）